

〔課題演習報告〕

住吉スタンダードの充実を図るキャリア教育の研究
—小中学校の学級活動(3)の系統的な実践を通して—

中 村 雅 司

Masashi NAKAMURA

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻生徒指導・教育相談リーダーコース
福岡市立住吉小学校

(2020年1月6日受理)

本研究は、キャリア教育を小中学校で系統的に行っていくために、住吉スタンダード(以下、SS)「あいさつ・掃除・自学・立志」を学級活動(3)(以下、学活(3))の柱として、教師へのコンサルテーションと授業を実施した。教師へのコンサルテーションは校内のキャリア教育研修でキャリア教育の捉え方と学活(3)の実践について研修を実施した。また学活(3)の授業構想を行うプランニングシート(以下、PS)を活用し、授業の前後にコンサルテーションを実施した。その結果、教師のキャリア教育に対する意識は高まり、授業への抵抗感は低くなった。年間指導計画に沿った学活(3)の実施により、6年生と中学1年生のキャリア意識調査では人間関係形成・意思決定・将来設計・情報活用の全ての観点で測定値の上昇が見られた。小中学校のキャリア教育において、系統的に設定した年間指導計画のもと、学活(3)の授業を実施していくことは、基礎的・汎用的能力の向上につながることを示唆された。

キーワード：キャリア教育, 学級活動(3), キャリア意識, プランニングシート, 住吉スタンダード

1 問題と目的

(1) はじめに

「幼稚園,小学校,中学校,高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について(中央教育審議会答申,2016)」(以下,答申(2016))では,自己の生き方に関わる資質・能力を育成するキャリア教育の充実が求められた。このことを受けて学習指導要領(平成29年告示)では,特別活動をキャリア教育の要と位置づけ,学活(3)で「ア 現在や将来に希望や目標をもって生きる意欲や態度の形成」「イ 社会参画意識の醸成や働くことの意義の理解」「ウ 主体的な学習態度の形成と学校図書館等の活用」の内容を学ぶことになった。

在籍校は施設一体型の小中連携校である。施設一体型の小中連携校としてスタートした5年前から研究主題を「能動的に学ぶ児童生徒の育成」とし,小中でユニバーサルデザインの考え方を取り入れた授業づくりに取り組んでいる。これは,本校

の目指す子ども像である「礼儀正しくよく学び社会に役立つたくましい児童生徒」の育成と深く関わっている。本研究主題を具現化するためには,児童生徒一人一人に主体的に学ぶ態度の育成が不可欠である。また,福岡市の学校指導の重点となっている福岡スタンダードを受けて,本校は,SSを設定し,義務教育9年間を見通した継続的な指導内容として①あいさつ②掃除③自学④立志⑤言葉(ふわふわ言葉)と食育を示している。SSに示された内容は,基本的な生活態度の形成や学習規律の形成につながるものであり,児童生徒の学習意欲の向上や主体的な学習態度の形成の基盤となるものである。しかしながら,本校ではSSに示された内容が各学年の発達の段階に即して具体的な授業として行われていることが少なく,SSに示された内容を題材とした学活(3)「一人一人のキャリア形成と自己実現」の授業実践が求められるところである。本校には,基本的な生活習慣の乱れや家庭での学習習慣が十分に形成されていないことが原因で学習内容の定着に課題がある児童生徒が見られる。このような児童生徒をよく学ぶ子どもに

育成するためにも SS に示された内容が、発達の段階に応じて確実に身につけることができるようにするキャリア教育の充実が求められると考える。

このことから本研究では、学習規律や基本的な生活習慣を小中学校で系統的に醸成していくことで、児童生徒の学習適応、学級適応、学校適応を促し、学校教育目標に掲げる「よく学ぶ子どもの育成」の具現化を図ろうとするものである。

(2) 主題の意味

研究主題に示した「住吉スタンダードの充実を図るキャリア教育の研究」とは、福岡市が児童生徒に育成することを目指した福岡スタンダードを受けて設定された、SS の視点である「あいさつ・掃除・自学・立志」を学活(3)の授業で確実に育成するということである。学活(3)の授業は、特別活動指導資料(国立教育政策研究所,2014)に示された「つかむ」「さぐる」「みつける」「きめる」という学習の流れで行う。また、副主題に示した「小中学校の学級活動(3)の系統的な実践を通して」とは、キャリア教育の要である小中学校の学活(3)の授業を系統的に行うとともに、若年教員の学活(3)の指導力を育成する学級経営支援や校内のキャリア教育の推進システムを構築するということである。

(3) 主題設定の理由

① 社会の動向から

答申(2016)では、自己の生き方に関わる資質・能力を育成するキャリア教育の充実が求められている。特に、児童・生徒一人一人の将来の生き方に関する課題の解決方法を意思決定する学習の展開が求められる。

② 在籍校における実態から

在籍校は施設一体型の小中連携校である。小学校と中学校の円滑な接続を図り、中一ギャップを減らし、小学校と中学校の交流も年間指導計画に位置付けられている。中学校の生徒に落ち着きが見られる反面、小学校の6年生にはリーダー性が

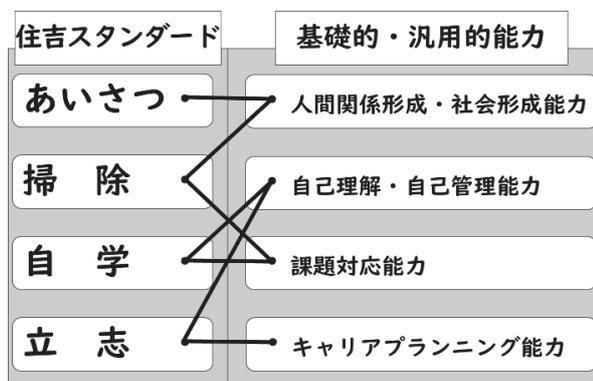


図1 SSと基礎的・汎用的能力の関連

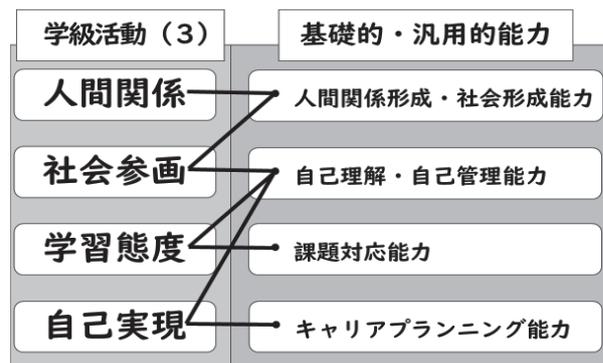


図2 学活(3)と基礎的・汎用的能力の関連

育ちにくいなどの傾向が見られる。これは SS に示された内容の指導が系統的に行われていないことが原因の一つであると考えられる。

SS とキャリア教育で育成が目指される基礎的・汎用的な能力との関係は図1に示すように考える。また、学活(3)と基礎的・汎用的能力との関係は図2に示す通りである。

(4) 研究の目的

SS の内容と学活(3)との関連を図り、系統的に実践していくことで、基礎的・汎用的能力をもとに設定した、共感的な人間関係の形成、自己実現に向かう態度、勤労観を育成し、社会的自立の基礎となる態度を養っていく。

2 研究 I

(1) 目的

小学校において児童の実態調査を行うとともに、SS の充実に向けた学活(3)の授業を脇田(2018)が作成した授業構想のための PS を使ってモデル提示し、全学級で授業を実施する。授業後、結果を分析、考察して成果と課題を明らかにする。

(2) 方法

実施時期 201X年8月から201X+1年1月
対象 A小学校の20学級(児童583名)

(3) 効果測定の内容と方法

児童に対しては授業実践前後に学校環境適応感尺度(ASSESS)(栗原・井上,2013)を実施し前後の変容を見る。担任に対しては聞き取りを行う。授業後の学習プリントの分析や、授業の振り返りを担任と連携して行い、授業効果や意義について意見交換を行う。

(4) 実践の具体

表1のように報告者が実施する授業計画を立てた。主体的な学習態度の形成に向けた学活(3)の授業を報告者が先行実施し、修正を加え他の学級でも担任が実践した。主体的な学習態度をどのよ

表1 学活(3)の実践題材

学年	実施日	題材
1年	12月7日	【上手な伝え方】
2年	11月15日	【質問・意見の言い方】
3年	12月12日	【話し合い方】
4年	11月30日	【聞き方】
5年	11月15日	【授業の受け方】
6年	12月21日	【授業の予習・復習】

うに考えているのか、事前に教師アンケートを実施した。結果は表2に示すように、聞き方・話し方を重視している傾向が見られたので、主体的な学習態度を「他者の意見を共感的に聞く態度」「自分の意見を持って交流に臨む態度」と限定した。

表2 「主体的な学習態度」教師アンケート結果

1 誤答を馬鹿にしない共感的な態度	14名
2 返事や発言のルールを守る姿勢	13名
3 発言や発表の意欲	7名
4 予習・復習をして授業に臨む態度	0名
5 他者の発表を聞く聞き方スキル	14名
6 ペアやグループでの話し合いのスキル	10名
7 聞き手を意識した発表のスキル	2名
8 課題に対して自分なりに考えようとする姿勢	13名
9 学んだことや自分の考えを発信しようとする姿勢	5名
10 自分の考えの参考にしようとする姿勢	6名
11 学びの成果を認め、喜びを実感する姿勢	7名
・ノートだけでなく説明をメモする姿勢	自由記述
・丁寧な字で記録し、家で見直す態度	自由記述
・授業から何かを得ようとする態度	自由記述
・しっかり学習準備して授業を受ける	自由記述

① 授業の構想

コンサルテーション前にPSを作成し、学年の教員に授業案を提案した。児童の実態を踏まえ検討し、ワークシートや授業の流れを修正した。各学級の実態に合わせた授業が実施できるようにした。

② 授業実践

各学年の中で若手教員の学級で報告者が授業を実施し、参観して協議した。授業内容を修正し、その他の学級では担任教師が授業を行った。

③ 授業後の振り返り

各授業ではそれぞれの児童が意思決定した取組を振り返るシートを活用した。一週間程度、取組を自己評価させ、コメントを加える形で振り返り活動を行った。担任教師によるコメントに加え、臨時にキャリア相談室を開設し、休み時間等にシートをもとに報告者がキャリア相談を実施した。

(5) 結果と考察

表4 ASSESSのt検定の結果

尺度	生活満足感		学習的適応	
	t値	p値	t値	p値
3年生 (n=33)	-2.14	.04	-0.41	.69
4年生 (n=30)	-2.47	.02	0.39	.70
5年生 (n=30)	-0.17	.86	0.62	.54
6年生 (n=30)	1.56	.13	1.23	.23

研究Iでは小学校の全学年で、主体的な学習態度を育成するための、学活(3)の授業を実践した。ASSESSの結果では表3に示すように、3年生の生活満足感と学習的適応、4・5年生の生活満足感に測定値の上昇が見られたが、表4に示すように、授業効果を実感するまでには至っていない。実践後の教師アンケートでは、「学活(3)の授業についての理解が深まった」「学活の進め方がわかった」という感想があり、SSの充実に向けた意識付けができたと考える。今後、小中連携の要として設定されたSSを充実させていくためには、小中の円滑な接続を図る必要がある。そこで、次年度は、対象学年を小中の接続強化期の5・6、中1に限定し、学活の年間指導計画に位置づけ、系統的に授業を行っていくこととした。また、あいさつ運動や縦割り清掃など学んだことを実践する場面を捉え、教師が関わり、指導を継続的に行っていくことが重要であると考えた。

表3 授業実施前後のASSESSの結果

尺度	生活満足感				学習的適応			
	実践前1学期		実践後2学期		実践前1学期		実践後2学期	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
3年生 (n=33)	43.00	9.00	47.33	8.57	51.91	13.58	52.61	14.57
4年生 (n=30)	49.27	9.80	54.70	13.86	50.30	11.92	49.33	12.94
5年生 (n=30)	56.03	14.39	56.40	14.89	53.57	13.79	52.43	11.39
6年生 (n=30)	50.16	13.92	45.66	11.05	53.88	12.45	50.88	12.03

次年度に向けて、学活(3)の題材をSSと関連させ、各学年の年間指導計画を作成した。総合的な学習の時間や特別活動と関連させ、実践の場を教育課程の中に位置付け、授業と実践を連動して教師が指導できるようにした。

3 研究Ⅱ

(1) 目的

SSの充実に向けた学活(3)の実施に年間指導計画を作成した(表5参照)。授業について学級担任にコンサルテーションを実施したうえで、年間指導計画をもとに学級担任が授業を系統的に実施することで児童生徒に社会的自立の基盤となる態度

を育成する。

(2) 方法

実施期間 201X+1年4月から201X+1年12月
対象

A 小学校の5・6年生, B 中学校1年生の全学級を対象とする。(9学級)

(3) 効果測定の内容と方法

検証には実践の事前と事後に、児童生徒質問紙として「キャリア意識尺度(小学校)」「キャリア意識尺度(中学校)」を実施して、実践の効果を測定する。その他、児童生徒の「あいさつ・掃除・自学・立志」に関わる行動変容や教師・児童インタビューなども活用し、多面的に効果の測定を行う。分析には、HAD(清水, 2016)を用いる。

表5 SSを重視した学活(3)の題材一覧表(小学校1年～中学校3年)

	あいさつ (ア)	掃除 (イ)	自学 (ウ)	立志 (ア)
小学校1年生	【あいさつ・5つの取り組み】 SSについて知り、取り組んでいこうとする意欲を持つ	【掃除の仕方】 基本的な掃除の仕方を知る	【家庭での学習】 毎日の宿題について確認し忘れずに取り組む意欲を持つ	【各学期のめあて】 【学年のめあて】 小学校生活に慣れ、学校生活への意欲を高める
小学校2年生	【学校のきまりとあいさつの仕方】 顔を上げて目を見てあいさつすることを意識する	【きれいな教室】 机周りや棚など身の回りの掃除に取り組む意識を高める	【家庭学習の仕方】 家庭での学習の時間や取り組み方を考える	【各学期のめあて】 【学年のめあて】 一年間の見通しを持って、各学期の学校生活に取り組む
小学校3年生	【気持ちの良いあいさつ】 立ち止まって、名前を呼んであいさつすることを意識する。	【きれいな教室】 教室全体の学級共有部分の掃除に取り組む意識を高める	【家庭学習の振り返り】 宿題の取り組み方について見直す	【各学期のめあて】 【学年のめあて】 中学年として下級生の補助することに意欲を持つ
小学校4年生	【気持ちの良いあいさつ】 時と場合に合わせてあいさつの仕方を考える	【掃除の意味】 掃除の意味について考え、主体的に掃除に取り組む意識を高める	【自学への取り組み】 自由課題の取り組みについて知り、意欲を持つ	【各学期のめあて】 【学年のめあて】 中学年として下級生の補助することに意欲を持つ 委員会活動に向けて、責任ある行動をしようとする意欲を高める
小学校5年生	【学校のきまりやあいさつ】 あいさつの意味やその影響について考える	【学校をきれいに】 縦割り掃除の意味を理解する。	【自学の工夫】 自学の取り組みを振り返り、課題の内容や取り組み方を見直す	【各学期のめあて】 【学年のめあて】 6年生にあこがれを持ち、進級への意欲を高める
小学校6年生	【学校のきまりやあいさつ】 あいさつの意味やその影響について考える。	【母校への感謝】 縦割り清掃のリーダーとしての意識を持ち、そうじ担当区域の掃除に主体的に取り組む意識を持つ	【予習・復習の取り組み】 弱点克服や長所伸張の目的を持って家庭学習に取り組む意欲を持つ	【各学期のめあて】 【学年のめあて】 中学校へのあこがれを持ち進級への意欲を高める リーダーとしての意識を持つ
中学校1年生	【生活の見直し】 小学生の見本となるあいさつを考える	【ボランティアの意味】 社会奉仕的活動についてその意味や目的を考える	【定期考査に向けた計画】 情報収集と分析、課題解決に向けて計画を立てる	【自分の将来】 【各学期の反省】 目標に向かうための中学校での生活を考える
中学校2年生	【生活の見直し】 小学生の見本となるあいさつを考える	【職業観】 社会貢献と仕事について考える	【自分の適性】 自分の興味関心や得手不得手を知り、自己理解を図る	【進路の計画】 【各学期の反省】 中学校卒業後の生活について考え、自分の取り組みを見直す
中学校3年生	【生活の見直し】 小学生の見本となるあいさつを考える	【ボランティアの体験】 社会奉仕的活動に取り組み体験する	【主体的な学習計画】 学習する目的や目標を意識し、計画を立てる	【進路決定に向けて】 【将来の生活】 中学校卒業後について考え、目標を設定し計画を立てる

※(ア)(イ)(ウ)は学活(3)の内容

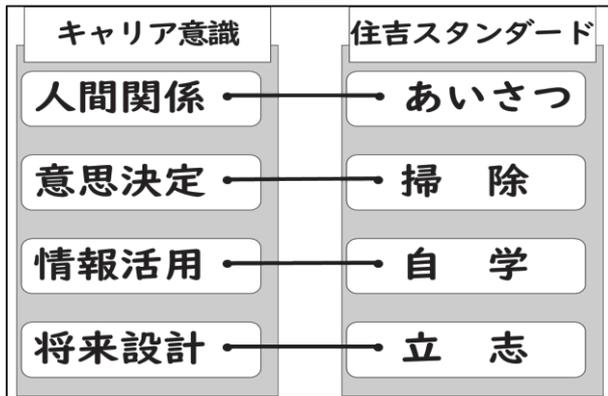


図3 キャリアアンケート項目とSSの関連

(4) 実践の具体

表5は指導の継続性を意識して作成した、題材一覧である。小学校低学年から「あいさつ・掃除・自学・立志」を意識し定着させるよう年間指導計画を構成して授業を実施した。中学校でも、SSの4項目で学校生活を振り返るように設定している。

SSとキャリア意識調査の「人間関係形成」「情報活用」「将来設計」「意思決定」の4観点の関連については図3に示す通りとし題材を設定した。

あいさつについては、よりよい人間関係の構築のための対人関係スキルと知識を授業で育成するため、人間関係とした。掃除については、掃除のやり方や整理整頓する場所など自分で考えながら決めることを重視し意思決定とした。自学はこれまでの学習や問題解決型の学習を活かし情報活用とした。立志は将来の自分を想像し、なりたい自分に近付けることを意識し将来設計とした。

学級担任へのコンサルテーションとして、学活(3)の学習計画をPSにまとめ、実施の前の学期に提案・説明を行い、教材の準備や、振り返りシートの作成の支援を行った。学活(3)の実践後は、児童生徒が決めた取り組みが実施できているかについて学級担任と検討し、個別にカウンセリングを実施した。授業実践をガイダンスと捉え、その後の実践を観察しながら個別にカウンセリングを行っていく。朝の会や帰りの会等を活用し振り返りの時間を設定した。評価は①～④で実施した。

①「あいさつ」に関する授業を行い、あいさつの仕方について学ぶだけでなく、あいさつの意味や目的、影響について考えさせるガイダンスを実施した。その後全校で取り組んでいるあいさつ運動の参加者数や参加の様子を観察し、実践後のアンケートを実施する。アンケートをもとに個別にカウンセリングを行い、次の実践へとつなげるようにした。

②「掃除」については小学校では縦割り清掃を行っており、清掃時間の前後に確認・反省の時間が設定されているので、反省の時間に振り返りシートを用いた自己評価を行っていくことで、事後のアンケートとした。

③「自学」については、自学ノートの提出率及び内容を実践の前後で比較した。

④「立志」については年間計画に学期のめあて、学年のめあてを設定する授業を実施し取り組み状況を評価した。

(5) 結果と考察

キャリア意識調査については①9月②12月と2回の調査を行っている。SSの4観点については、それぞれの実践の場での児童の変容を見取っている。

① あいさつ

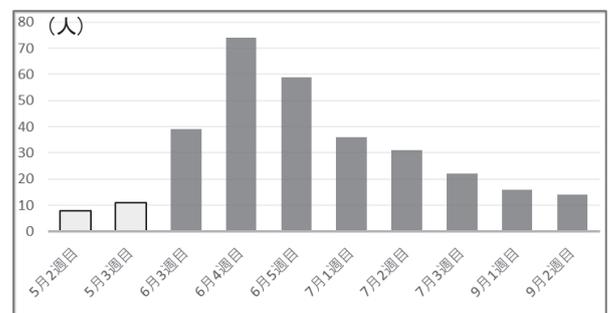


図4 小学校児童のあいさつ運動参加者数の推移

図4にはあいさつ運動の参加者数の推移を示した。全学年「あいさつ」に関わる学活(3)の授業を実施した6月3週目以降、参加者数は増えている。しかし授業後時間がたつとともに参加者が減少している。日々の継続した指導と授業のつながりを意識した取組が必要である。

② 掃除

縦割り清掃の状況については教師アンケートでは意欲の向上を感じている教員が多かったが、児童の振り返りシートでは、自己評価の数値の波が見られた。これは授業を受けたことで、自分の掃除の取り組みを客観的にみるようになり、厳しい評価につながった児童がいたことが考えられる。

③ 自学

自学に関しては家庭学習の内容の充実や提出率の向上が見られた。自分の苦手な教科の学習に取り組み、弱点克服を目指す児童や、得意な教科を伸ばす長所伸張を目指す児童の姿も見られた。

④ 立志

立志に関して、学期のめあてや学年のめあてを具体的に、自分に合ったものを設定させ、取組を意思決定させた。最高学年に向けて、信頼される6年

生の姿を想像している児童もいた。中学校での生活を具体的に思い描き、今できることを真剣に考

表6「キャリア意識調査」小5・6, 中1結果

小学校5年児童のキャリア意識						
n=82	201x+1年5月		201x+1年12月		t値	p値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
人間関係形成	25.3	3.69	25.1	3.14	0.47	0.64
情報活用	23.96	3.65	22.96	3.9	2.46	0.02
将来設計	19.5	2.51	18.78	2.59	2.46	0.02
意思決定	20.01	3.21	19.65	3.1	1.19	0.24
小学校6年児童のキャリア意識						
n=77	201x+1年5月		201x+1年12月		t値	p値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
人間関係形成	25.55	3.7	25.72	3.44	-0.46	0.65
情報活用	24.14	3.41	24.78	3.08	-1.71	0.09
将来設計	18.99	2.49	19.23	2.1	-0.94	0.35
意思決定	20.88	3.52	21.08	3.02	-0.63	0.53
中学校1年児童のキャリア意識						
n=82	201x+1年5月		201x+1年12月		t値	p値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
人間関係形成	34	5.33	34.7	4.64	-1.6	0.11
情報活用	25.52	3.75	25.77	2.89	-0.64	0.52
将来設計	28.23	3.23	28.76	3.18	-1.37	0.18
意思決定	36.51	5.89	37.34	4.81	-1.59	0.12

える姿が見られた。

PSを用いた授業提案等を通したコンサルテーションを実施して担任が授業を実施している。授業後の振り返りとして、相談室を設定しているが、ワークシートの振り返りが中心となっている。

相談室では一人一人の意思決定後の取り組み状況に応じた細かなカウンセリングを行うことが必要と考える。今後の相談室の活用方法が課題である。また朝の会、帰りの会等で学級全員の取り組み状況を振り返るグループカウンセリングを行っていくことで振り返りの充実を図っていきたいと考える。さらに、系統的なキャリア教育を行っていく手立てとしてキャリアパスポートの活用を進める。2学期以降の学活(3)の授業については、ワークシート等の資料をポートフォリオ的な継続的な振り返りシートとして活用していくことも検討する。

来年度4月よりキャリアパスポートが全面实施

となることも踏まえ、在籍校にキャリアパスポートとして活用できる授業を提案していきたい。

キャリア意識アンケートについては、小5～中1の全ての児童・生徒に実施した。5月と12月の結果をHAD(清水, 2016)の対応のあるt検定を実施した。

表6に示したように、5年生にはキャリア意識の向上は見られなかった。6年生・中学1年生については平均値の上昇が見られた。これは、小・中学校接続期において円滑な接続を図り、SSを基本とした学活(3)の柱として位置付けたことで、系統的な指導が実施されたことが有効であったと考える。6年と中1の4項目で向上が見られたことは、施設一体型の小中連携校で系統的にキャリア教育を推進する効果を得ることができたと考える。

小学校6年生でアンケートの向上が見られた情報活用は自学の授業で扱った家庭学習の題材が効果的であったと考える。具体的には、他の児童生徒の自学の内容を知り、自分なりの取り組みを考えていくことで、自分に合った自学を探ることができたことと、学級担任による継続指導が相まって効果が見られたと考える。

中学校1年生の将来設計の項目も向上が見られた。これは、時間の使い方、考査前の家庭学習について授業を実践し、その効果が表れた結果であると考えられる。人間関係形成についてはよりよい人間関係を形成するための、あいさつや身だしなみ、礼儀等を重視した学活(3)の授業の効果が表れたと考える。意思決定については、身の回りの整理整頓について考え、実践していく学活(3)の授業をPSで提案して、学級担任に授業を行ってもらったことが効果的であったと考える。

4 研究Ⅲ

(1) 目的

小中学校全職員に対し、校内研修の実施や研修資料の配布をし、キャリア教育、SSの充実に向けてコンサルテーションを行い、教員の意識の向上を図る。

(2) 方法

実施期間 201X+1年4月から201X+1年12月
対象 A 小学校, B 中学校の全教員を対象とする。

(3) 効果測定の内容と方法

毎回、研修後にアンケートを実施し振り返りの記述を基に、教員の意識が向上したかを測定する。

(4) 実践の具体

研修計画は表7のように設定し、毎月生徒指導

表7 校内研修計画の目標

期日	目標
第一回 5月	キャリア教育の全体像をつかみ、キャリア教育を充実しようとする意識を持つ。
第二回 6月	キャリア教育の充実に向けた方途をイメージし、具体的な取り組みを意識する。
第三回 7月	小中の接続を意識したキャリア教育について考え、キャリア教育の目標を共有する。
第四回 8月	1学期の学活(3)の授業の取り組みを振り返り、2学期の契機計画を立てる。
第五回 9月	学活(3)の具体的な授業実践方法を確認し、児童生徒の行動・意識の変容を意識する。
第六回 10月	キャリア相談室について理解し、具体的な活用方法を考える。
第七回 11月	授業実践の報告(小学校)(中学校)
第八回 12月	最終報告の事前報告
第九回 1月	次年度の年間指導計画について、キャリア教育の充実に向けた編成を行うことができる。
第十回 2月	次年度の小中連携した取り組みに向けて意識し、各学年毎、校務分掌毎に準備を進めることができる。

全体会で研修を実施した。内容は学校長と相談の上、①キャリア教育の概要から、②在籍校の実態③学活(3)の授業について、④実践報告⑤来年度に向けた取組などで設定した。

研修の他に小中学校の教員に対して研修通信を発信し、キャリア教育の推進に情報や授業実践に向けて活用できるツールや資料も提供した。

(5) 結果と考察

教員へのアンケート調査は(全く思わない・あまり思わない・少し思う・とても思う)四件法でキャリア教育や学活(3)について調査した。昨年度と比べた意識調査を自己評価で実施した。

その結果は表8に示す通りである。「キャリア

表8 キャリア教育・学活(3)教師アンケートの結果
(小学校教員18人、中学校教員2人)

	全く思わない	あまり思わない	少し思う	とても思う
① 昨年度と比べ、キャリア教育について理解が深まったと思えますか。	0%	0%	62%	38%
② 昨年度と比べ、学活(3)の授業実践に自信が持てましたか。	0%	19%	71%	10%
③ 昨年度と比べ、住吉スタンダードについて理解が深まったと思えますか。	0%	0%	67%	33%
④ 昨年度と比べ、学活(3)の授業は計画的に実施できていると思えますか。	0%	30%	65%	5%
⑤ 昨年度と比べ、学活(3)と他教科との関連を意識するようになったと思えますか。	0%	19%	62%	19%
⑥ 児童は、学活(3)やその他の教育活動によって挨拶への意識は高まっていると思えますか	0%	0%	95%	5%
⑦ 児童は、学活(3)やその他の教育活動によって掃除への意識は高まっていると思えますか	0%	33%	62%	5%
⑧ 児童は、学活(3)やその他の教育活動によって自学への意識は高まっていると思えますか	0%	33%	53%	14%
⑨ 児童は、学活(3)やその他の教育活動によって立志への意識は高まっていると思えますか	5%	28%	62%	5%

教育への理解が深まったか」という質問に対し38%の教師が「とても思う」と回答している。残りの62%の教員は「少し思う」と回答している。このことから研修を受けた教師のキャリア教育に対する理解が深まり、意識が変化していると考えられる。学活(3)の授業の自信については、「とても思う」と回答した教師は10%であったが、「少し思う」と回答した教師と合わせて81%であった。残りの19%は「あまり思わない」と回答している。「SSの理解が深まったか」という質問に対しては全ての教員が「とても思う」「少し思う」と回答しており、SSへの理解は深まったと考えている。昨年度作成した学活(3)の年間計画の計画的な実施に関しては肯定的な回答が70%だったのに対し、30%の教師が「あまり思わない」と回答している。

これは、学活(3)とSSの連携を重視したため、学年初めに計画していることが原因ではないかと考える。今後、年間指導計画の修正が必要である。他教科との連携に関しては意識するようになったと思うと肯定的な回答をした教師が81%であった。19%は「あまり思わない」と回答しており、他教科との連携、実践の場としての連携の具体的な実践を提案することができなかったことが原因だと考える。

SSの四つの観点「あいさつ・掃除・自学・立志」について児童の意識が高まったかどうか、教師に対するアンケートを実施した。あいさつについては全ての教師が肯定的な回答をしている。これはあいさつ運動など共通して実践に取り組める場があり、それぞれの教師の継続的な関わりが見られたことが原因と考える。掃除については「あまり思わない」と回答した教員が33%であった。これは集中して掃除に取り組めていない児童に対する、継続指導ができていないことが原因だと考える。在籍校は縦割り清掃を実施しており、掃除現場のリーダーである6年生への指導と学活(3)の授業改善を行う必要がある。自学については33%の教員が「あまり思わない」と回答している。家庭学習の充実に焦点化した題材の設定が必要であったと考える。立志については33%の教師が立志に対する意識が高まっていないと感じている。これは学校生活や家庭生活の中での目標設定が、立志につながるようなものとして捉えられていないと思われる。教師に対する研修と児童に対する指導を継続していく必要があると考える。PS使ったコンサルテーションや校内研修を通して、キャリア教育の概要についての理解や学活(3)の授業づくり

について抵抗感が減ってきている。これは、担任と共同で授業をつくり、実施することで学活(3)の授業を示すとともに、研修計画に沿って校内研修を実施してきた結果であると考えられる。教師の自由記述では、あいさつに関しては、「自分からあいさつをする児童が増えた。」「あいさつ運動に参加する児童が増えた。」というあいさつへの取り組みの成長の記述が見られた。掃除に関しては、「反省会での振り返りを意識して責任を持って自分の掃除区域をきれいにしようとする姿が見られた。」という記述が見られた。自学に関しては、「具体的な方法や見本を見せたことで、計画的に自学に取り組む児童が増えた。」という記述が見られた。立志に関しては「進級・進学を見据え、目標の必要性に気付く児童が増えた。」と当該学年での役割の自覚や将来の自分を意識する児童についての記述があった。これらの記述からは、児童の成長の姿を見取り、価値付けていく教師の姿が期待され、継続的な指導と児童生徒の成長が期待される。

5 総合考察

本研究では、キャリア教育の目標である社会的職業的自立の基礎を養うために、小中学校で学活(3)を中心とした系統的な指導を目指し、教師へのコンサルテーションや児童・生徒への指導を実施した。職業的な指導だけでなく、社会的自立につながるキャリア教育を推進した。月一回の校内キャリア教育研修では、キャリア教育の概要、小中学校でのキャリア教育の実践紹介、学活(3)の授業づくりについて研修を行った。また、学活(3)の授業へのコンサルテーションを行い、PSの提案や、授業の先行実施、臨時でのキャリア相談室の開設を行った。教員のキャリア教育・学活(3)への意識は高まり、教員へのコンサルテーションは有効であったと考える。全教員に対してキャリア教育の推進のために研修を行ったことで、参画意識や他教科との連携の意識が高まり、学校全体でキャリア教育を推進していこうとする可能性が示された。また、担任に対しては、ニーズに応じた内容、相互の関係性に留意したコンサルテーションを実施することで、主体的な教師の関わりや、系統性のある授業実施を促す一助となることが示唆された。

生越(2018)はキャリア発達を促す指導と進路決定の指導を適切に選択・決定するためには自己存在の価値を信じるのが大切だと述べている。また、社会や学校との「つながり」の中で、有用性に

捉われず自尊感情を高め、自己の価値を認めていくことが大切であると述べている。社会や学校、他者との関りの中で自分の存在を認め、価値を見つけていくことが大切であり、児童・生徒が自ら社会の課題に向き合っていくことは小中学校の教育に深く関わってくると考える。本研究では、小中学校において自分の存在を認め、価値を見つけていくために、自己の課題を認識し、解決に向かって努力する自分を認めることに重点を置いて指導した。このことが、教師や周りの児童生徒から認められる中で自分の存在を確かにしていくことにもつながったと考える。授業へのコンサルテーションでは、自分の課題を見つけ、解決策を話し合い、取組を決めるという過程を重視した授業を設定した。また実践の場を設け、児童生徒相互の振り返り活動を行った。これは自己と他者の努力を認め合い、関わり合い、高めあうことにつながったと考える。

長谷川(2018)では、小学校・中学校時代にキャリア意識が高い者は大学入学後もキャリア教育に対して肯定的に捉えており、将来の就職を意識して進路選択をしている傾向が明らかになったと述べている。これは小学校・中学校段階でのキャリア教育の重要性が示されたということであり、本研究においても、小中学校の接続期である小学校6年生・中学校1年生の時期にSSの「あいさつ・掃除・自学・立志」を柱に系統的にキャリア育成を図っていくモデルを示すことができたと考える。

主な引用・参考文献

- 長谷川誠(2018) キャリア教育政策の展開と今日的課題—初等中等教育から高等教育への接続を視点に— 神戸松陰女子学院大学研究紀要 7 27-41
 文部科学省国立教育政策研究所生徒指導研究センター(2011) キャリア発達にかかわる諸能力の育成に関する調査研究報告
 新見直子・前田健一(2009) 小中高高校生を対象にしたキャリア意識尺度の作成 キャリア教育研究 27 43-55
 生越達(2018) 現代社会における児童生徒の自尊感情：自己有用感を越えたキャリア教育の在り方 茨城大学教育学部紀要 67 715-734

謝辞

本研究に際し、福岡市教育委員会、在籍校の校長先生、諸先生方に多大なるご協力を頂きました。深く感謝申し上げます。